

イロコイ・インデアンの復活運動の意味

(一)

ここ数年キューバや、アジア、アフリカの国民運動や革命運動が大きく注目されているが、少し方向を変えて、イロコイ族の復活運動について報告して見たい。

イロコイ族は、合衆国北部のセントロウレンス河に添う山嶽地帯に定住し、六つの部族—モハアク、セネカ、オノンダガ、オネイダ、キャユカ族から成り、互いに密着して、イロコイ連盟を作り「インデヤン・ヴェ」という新聞まで出している。

彼らは、バスク語に似た土語で思考するために、その英語は、一種風変りな物だといわれている。

六つの部族の中、セネカ族はモナコ位の大きさの地域を領しているが、一八四八年パリ・コンミュンの時にも、当時欧州を吹き巻くった革命的風潮に深く影響され、自分達の古い

生活を民主的な物に変革した経験を持っている。しかし現在では、イロコイの全部族はアジアアフリカの国民運動に刺激されているようである。

そのイロコイ族へのこの影響は、克蘭（氏族）時代への強い復帰の精神を燃え上らせているものようである。これは、歴史を固定した体系を通じてしか捕え得ない者には理解しにくいことである。

イロコイ族は、ヨーロッパの権力国家などを造り上げようなどと考えたことはなく、彼らは自分自身の生活を他者の干渉から自由にせんと努力しているのである。

彼らの生活は、本来、ヨーロッパや、アメリカや、ヨーロッパ化したアフリカや、アジア人に知られているものとは全く異って、欧州がローマ人の征服に遇った当時の社会組織、即ち、母系克蘭制度の影響を強く止めている。それはまた無政府主義的な自由社会と共通する要素をもつ一つの社会形態である。

アナキストがブルジョワジイから嫌われるように、インデアンに対しても、人々は、子供時代から映画などの影響によって、知らず知らずの中に、レッド・インデアンと云えば、黒い皮膚、色どられた顔、羽根飾りをつけた身体等のぞっとするような祭儀を連想する。そうして首切りや人肉を平気で喰う非人間的な伝説をデッチ上げている。勿論、インデアン達は戦争の時は、惨虐である。けれども惨虐のための惨虐に至っては日本人や白人以上に惨虐ではない。その証拠は、彼らは南京暴虐や、アウシュヴィッツや、三十年戦争の凄惨な地獄の

赤鬼であった事はない。非人間的なその絵姿は、白人達がインディアンの土地をかたり取らんがためにデッチ上げたものである。このカッパライ行為は今もなお続いている。そうしてこれこそ、現在のイロコイ族のレジスタンスの原因の一つである。

(二)

部族最高会議は、イロコイ連盟の本部のあるオノンダガで開かれる。この部族の寄合へ、誠実な民俗学者エドモンド・ウィルソンが出席するきっかけを持ったのは、部族の一部の者が、セントロウレンス河のダム構築によって、自分達の土地から追われ、隣接の新開地へ移住したが、この新開地は一七八四年の条約によって、既に、彼らの物になっていて、その権利を合衆国政府に要求する運動の指導者アロウに会いに行ったことによる。そしてウィルソンはイロコイ諸族の生活を記録することを得たのである。

彼はイロコイの原始的な民主主義に強く打たれた。祭儀には奥儀を伝える者がおり、クランの母親はしばしば干渉を受けるけれども、秩序を保つのを注視する権威の介入はない。概括的な意見や感情に左右されて、誰も口論を訴訟に持ち込む者はなく、決して「エテニオン（醉拳妄動の女神）に利益を与えるようなことはしない」という。

部族の寄り合いは、厳粛と不秩序が奇妙に入り混ったもので、それは、どんなブルジョワジイの議会制度よりも効果的である。イロコイ諸族は、投票ということには絶対反対であるその代り、議案はクエーカー教徒のように満場一致に達する迄討論される。もし満場一致がなく、適当な妥協案もない場合は、却下される。これは多数投票制よりもテンポは遅いが確実さは深い。

婦人の位置は高く、彼らは婦人に優れた位置を与える。というのは彼等は、所謂文明人とは比較にならないほど動物と親密で、その習性の秘密に通じているために、動物がその子孫の維持に当って、その母に依存する度合いが如何に強いかを良く知っていることにもよると思われる。

イロコイ諸族は、部族だが父系制度ではなく、母系クラン制度の伝統の中にあるとウィルソンはいう。多少マルクス主義的なW・ライヒにいわせても、イロコイ族は必然的父系制度へ移る過程にある、セミ母系クラン制度だというだろう。しかし、彼らはそれに満足せず前述の如く、純粹のクラン制度への熱烈な復讐の精神に燃えており、我々はそれに満足せずその生産関係をも含めて、個々人の意志が大きくのしかかって来ている歴史的事実を知る。クランの母として知られている年長の婦人は、その部族の首長の名を持っている。女達は男が酔っぱらったり、その他、願わしくない事をやった時には、最初は叱るが、繰り返し返えされると男を家から追い出す。なぜなら、家は、その女に属しているからで、クラン制度が完

全だった早い時代には、男は必ずしも、女の家に住んでいなかった。女もその属するクランの中で、多くの男達と共に住んでいた。男達が狩や戦に出ている時には女は家で働く。土地は女によって耕されなくては稔りはないと信じられている。

この古代的信仰と「もし科学が暴君と殺人と強奪と国民道徳の退化を生み出すより外に能力がないならば、私は我々の野蛮な尊重すべき憐人達と共に、無知と正直とをむしろ選びたい」と叫んだトマス・ジエハアソンを論ずるほど知性的なイロコイは、アメリカ中部地方に多い小社会（主に宗教団体に属する）の人達のように、生産手段の近代的拡充、技術の近代的進歩という資本主義的な、または社会主義的な夢魔をさらりと棄て、棒で土地を耕して、永い間鎌を用いなかった。鎌は女にとって重過ぎるというのである。

この婦人の優位と、生産方法の原始性は、確かに一面、保守主義を助長しているが、インデアン社会の安定は、これによって保証されている。

イロコイ諸族のクラン社会への熱望の祈りの中にひそむ革命性と、この保守性との間の矛盾は、マルクスよりも寧ろ、ウエイユの云うプラトンの思惟の弁証法のテーマである。それは相互にとって恩寵的であるように思える。

(一九六四)

解体期の芸術

解体期の社会は、おもむろに個人の心理にまで影響を与えずにはおかない。こんどのバラバラ事件などもその一例だが、すでに絵画や詩の世界では、ずっと前からこの傾向は表われていた。ダダからシュールリアリズムに至る一群の連中にとっては、あらゆる日常的な現実の解体、あるいは反逆は茶飯事だった。

彼らの手にかかると、リングゴ、机、建物、人間などは皆イビツにされ歪められた。勿論、彼らはデフォルメの動機を創ったアナキスト達のように、国家の解体には手をださなかった。国家はカンパスに塗り込むには、余りにズウ体が大きすぎたのかもしれない。

彼らは手頃なリングゴなどを手玉にとったが、その解体の基底には、スコラ哲学のくさ味もないではなかった。スコラ達は、神をあらゆる物の中へ押し込んだ。彼らは、神はリングゴにおいてはまるく、キューリに於いては細長く、パンに化身しては命さえつなげるぞと、号して食っていたが、デフォルミスト達はスコラ達とは逆に、リングゴの中へ神を詰め込んで売ら

なかったとは言えまい。僕は彼らを非難しているのではないことは、モジリアニが、ある奇異なる性態を解体して見せたタブローを好事家に売った時、彼は女を後から犯した罪をざん悔した男に、スコラ達が買わせた免罪符の一〇〇〇〇分の一の値段も取らなかったことを、心から感心している位だからだ。

デフォルメに対してブルやボル共は、勿論ソッポを向けた。彼らの利己主義は知らず知らずの中に、都市を、村を、組合を、個人をバラバラにして国家の権力に売り渡すことになったからだ。おまけに彼らは、この集中された社会形体の中に秩序の整美を鑑るのだが、人間本来の協同の紐帯のたち切られた社会形体の中には、解体以外の何もありえないのだ。つまり、それらの現実には虚構であった。

現実が現実でなく、虚構が現実だということ突き詰めて行き、其処にうずくような崩れていく美をとらえるのが、デフォルメの一つの意味だが、虚構が現実だという点を固執するの余り、大幸のようにニヒルの深淵をのぞむには、余りにデフォルマシオンには活力が有り過ぎる他面があった。

僕は虚構なデフォルメの中に活力を見ることに賛成する。

晩年になって人気を失ってから、益々活力の振幅を上げ、現実を蹴り、自己の無比なる強さを示し始め、断平として虚構をのり越え、魔術の中へ自らを投入するヘルマン・ヘッセや、近来、益々魔術的になって行く、ピカソを想う時、デフォルマシオンは、そ

の極限に近づいた刹那に、それは魔術に転身するように思える。

そして、魔術は当然、呪術の出であるわけだが、若し、フレザーが言うように、科学も宗教も、その母親が呪術だったとすれば、近代科学も新しき宗教も、魔術と従兄弟同志の中だと言わなければならない。

(一九五二)

構成主義・シュールリアリズム及び 反社会主義的リアリズム序論

(一)

映画「七人の侍」を見た一小学生が「あのサムライはなぜウンコやおシッコをしないの」と実存的な不安を感じて、その母に問いを発したということです。ぼくはこの話を聞いて「裸の王様」の話はまだ生きているのだと、つくづく思いました。こういう無垢な眼に、もし詩人あるいは画家としての天分が宿っていたとして、例えば東京の自民党幹事室、ロンドンのスエズ問題協議会、あるいはクレムリンの内部を見せたら、おそらくピカソの「ゲルニカ」以上に奇怪な、この世の物とは思われないようなデフォルメを、やって見せてくれるのではないのでしょうか。

又、逆にその眼が、詩人あるいは画家としてのそれであつたにしても、不敵さを欠いたいわゆる古典主義的なもの（ぼくはこの中へ写実主義、自然主義、あるいは社会主義

的リアリズムをも入れて考えているのですが）であつた場合、その眼は、その時代の一般鑑賞者と共通の政治的・道徳的そして美学的な思想感情の基礎の上にあぐらをかいて、その時代が普通妥当とするものの中から、真あるいは美を選んで表現するのではないかと思ひます。

リアリズムの概念が、由来あいまい極まりないものだからと言って、ぼくが今、社会主義リアリズムをも古典主義の仲間に入れたことについては大方の異論があるでしょうが、社会主義リアリズムも、その生まれ故郷ではその社会が安定性を得るために、全く画一的な表現様式を求めていて、表現様式の異様な、あるいは新奇なものは一切「形式主義」としてこれを拒否し、秩序、均斉、平衡などという無機的な静止の概念への絶えざる復帰を希求し続けており、ダイナミックな生成あるいは生命の自由な発想を抑圧せんとしている点において、まさしく古典主義と同じ穴のムジナだと言つて過言ではありません。

その結果、表現過程において選択や余分の細部が切捨てはなされるにしても、それは芸術家の方法ではなく、親方、即ち独裁政治家の一定の規範にはまる政治的・裝飾的規格品を製造する職人のそれとなつて、芸術家は全く職人に転落してしまつている点においても、正しく古典主義的であります。何故に独裁国家がその規格にはずれた様式を形式主義として迫害し、社会主義的リアリズムを固執するのでしょうか。それはもし、芸術家が職人たることを飽くまでも拒否して、自由を本質とする芸術に魂を奪われたとすれば、遂には独裁国家それ自体

を否定しはしないかという杞憂です。要約すれば独裁国家はH・リードの断言する如く、芸術の様式如何を問題にしてははなく「芸術それ自身に対する恐怖を感じているのです。この恐怖は、かつて中野重治にも現われたようです。なぜ彼が茂吉批判にあれほど没入し「歌のわかれ」を書かねばならなかったのでしょうか。ばくは彼が万葉の本質をなす情緒の自由な芸術性に恐怖を感じたのではないかと思えます。この情緒はその後漸次骨抜きにされ、近代に入るに従って甘い抒情のみが残存物として抽出され、近代古典主義の強い防壁となりました。中野はこの残存物と、彼の知性の中にある社会主義的リアリズムに対する頌歌的憧憬とを、あやまって対立物と考えている辯に、前述の残存物の強さに嫉妬すら感じていたようです。日本のインテリ左翼は中野がこの残存物を捨て去ったと思っっていますが、そうではなくて、彼は中野式の止揚をあえてしすぎません。

弁証法的な理論の世界では、この残存物は異質物にかわっているはずですが、現実の世界ではソ連の帝国主義的な資本主義が、アメ公あるいは日本の資本主義を誇大、強化した代物に過ぎないように、この甘い抒情も、本質においてはいささかの変化もなく、ただチョッピーリと知性の辛子をきかされたり、リリシズムの言語的な別名「誇大な頌歌」となって、職人仕事の古典主義的モニュメントレーニン・スターリン像をたたえているだけです。

(二)

前述の古典主義的なものを根こそぎに廃棄しているものは、言うまでもなく構成主義とシュールリアズムです。ここではこれらのものがどんな哲学背景をもち、又どのような伝統を経て今日的な様式を打ちたてたかについてはふれないことにしますが、これらを形式主義的なブルジョア類廃期の産物などとケチをつけるのは、実に無定見も甚だしいとだけは言っておかなければなりません。

まず最初に構成主義からはじめますが、詩の領域ではシュールリアリストの詩人達の活躍にくらべて、構成派の人達の活動は媒体となる素材が文字でなければならぬと考えられていた関係から、非常に制限されて、日本においてなどアナキスト詩人萩原恭次郎が雑誌「マボウ」に、多分フウリエの「四個運動理論」のスタイルから借用したと思える「使用活字が行間でトンボ返りを打っている」と言ったような構成の詩を書いたのが最後で、その後の発展は止絶した感があります。この止絶は媒体の關係からくる宿命性にあるのではなく、むしろ作爲的な政治的な力の方が大きかったと僕は考えています。というのは、当時マルクス主義

運動が盛んになってきた日本では（その後の日本共産党がそうであった如く）その直系傍系の芸術家どもまで、まったくソ連の御意のままにふるまわねばなりませんでした。ところでソ連ではどんなことがおこっていたのでしょうか。

一口に言えば、ソ連の構成主義は作爲的な政治的迫害のために、亡命を余儀なくされたのです。この迫害の特異性は重大ですから、まとめて後述します。すると日本の共産党直系傍系の疑似オッチョコチョイの芸術家どもは、直ぐにソ連の尻馬にのって、これを構成主義の没落ときめつけ、前述の如く日本での構成主義の発展を阻止せしめてしまったのですが、これに反して、この亡命者達はドイツではパウハウスやダダ、フランスではシュールリアリズム発生の側面的基盤をなして、ますます発展的に進行していったのです。

ロシア革命直後、詩、音楽、殊に絵画の領域では、十一月革命以上に革命的な主張もったガボヤ、ベルスナウのような一群の芸術家が、ソ連にはいりました。彼らは古典主義的なリアリズムを否定するどころか、一切の自然なものからの決別を宣言し、機械を象徴とする抽象そのものへの結合を重視し、絵画の媒体として絵具よりも鋤鉄を選び、平面的な凶面の完成よりも空間的な構成に執着していました。

一九一七年から二十二年に至る素晴らしい革命の波にのって、構成主義者達はその主張を實踐に移すと同時に、一方旧帝室アカデミー会員や同質の古典主義を片っ端から追い出しはじめていたのです。レーニンをはじめとして共産主義指導者達は、当初、この芸術および芸術家

の問題には無関心の態度をとっていました。これはレーニンが聡明であったからではなくて、御大マルクスが芸術の弁証法的格付に失敗して以来の伝統を、模倣していたに過ぎません。

彼らは革命を政治や権力の関係として考える以外の考え方を知らず、一度せきを切った革命の流れは、民衆の全文化的部門にまで滲透するものであることに気付かなかったのです。かくの如く、文化的にも感覺的にも余りに素朴であった当時にも、共産主義者達の眼には前述の構成主義者達の主張や、その実践的作品が、どのように映じたかは言うまでもないことでしょう。おまけにその指導者達の主張にとっていけなかったのは、クロポトキンの言うように「思想の大胆」さをなげいていたことでした。指導者達は民衆が革命の流れをとことん押し進めんと希望しているに反して、革命をせきとめんとする願望―休息・静止・平衡・秩序―を切に要望していました。この願望と構成主義者達の願望―流動・発展・生成―とは絶対に相入れない対立物でありました。

かくして当時の共産党指導者は、古典主義的なアカデミヤン達と陰でこっそり手を握りはじめたのです。そして旧帝制時代に勢力をもっていた古典主義者達を、極端に擁護しはじめたのです。勿論この古典主義的なるものは社会主義的リアリズムと名前だけは変えましたが、それはH・リードも断言している如く「大学とかアカデミーの如き古い保守的な機関が、革命の嵐の真只中における新しい政治組織の内部で、旧制度の反動的な理想を維持する」道をたやすく見つけうることを証しています。甘い抒情的残存物が姿を変えて如何に深く我々の

心性に付きまどっていることでしょう。商標や宣伝を信ずる我々の心理機構のなんとブルジョア的なことでしょう。

(三)

シュールリアリズムはその生誕がずっとおそく、衆知の如くフランスで開花したために、構成主義者達がソ連でうけた特異な政治的迫害から、遂には亡命を余儀なくされたような歴史はありません。しかし彼らも確かに形而上学的亡命はしました。形而上学的と言ったからとて、なにも観念的な遊びと規定する必要がないことは、アンドレ・ブルトンが無償行為の絶対自由性を理論づけ、個人の欲望以外の一切の決意を否定し、無意識の優位性を強調して「最も単純なるシュールリアリストの行為は、ピストル片手に街へ飛び出し盲滅法に群集をうつことだ」と書いた時、多くの優秀なシュールリアリストが、一点の後悔もない冷静な自殺や乱行(生の花)へ没入したことも明らかです。彼らは商人やサラリーマンによって規定され支配される、リアリスティックな世界から遁れることができるなら、それがたとえ最悪のものだとしても、それに魂を売り渡す決意をしたのでした。かくて、彼らはソ連の独裁、イカサマ裁判、人殺しを真っ向から肯定しました。(現在世界で共産主義運動がフランスで

一番盛んな根本理由の中で、このニヒリスティックなシュールリアリストの捨身の実践が、どのような比重をなしているかは良き研究課題だと思えます。しかしこのマルクス主義肯定は間もなく、シュールリアリズムの根本テーゼ、一現実に夢を、合理に非合理を通俗に驚異を、安定に焦燥を、人間の有罪性に対して無罪性という確信と矛盾することを彼らに気付かしめました。本来これらの対立物は、その一方だけを統一して願求しなければならぬ筈ですのに、彼らはことに最後の対立物の一方、即ち無罪性を強調するの余り、とんでもない落し穴へ首を突っこんだことに気付いたのでした。

彼らはソ連独裁、イカサマ裁判、人殺しなどが、如何に古い歴史的通俗性をもった代物に過ぎなかったかを知りました。おまけに、マルキストどもは合理主義の守護神面をしている。かくて、夢、驚異、非合理、及び真の無罪性の尊厳を創造せんがために、彼らは決然としてマルキシズムと決別しました。彼らはあらゆるものの破壊に乗り出しました。カミュによれば「まず詩によって呪咀の面において」、ついで、肉体をもってこの卑劣な時代の大空へ五彩の光芒を放つ虹を描かんとする新しい苦行へ沈潜して行きました。虹がその美しい姿態を現わす前には、大空は必ず破壊的な嵐の洗礼を受容せねばならないように、破壊、無秩序の聖書シュールリアリズムは、どうしても創造とは切っても切れない新しいモラルを要求しはじめました。

かって、この地上において誰も発見したことのない新しいモラル願求の焦慮にもえはじめ

ました。シュルリアリズムの斗将ブルトンは、勿論まだこのモラルを発見できませんでした。焦慮の余りこの異様な天才は、一人ひそかに愛に思いをひそめはじめたと言われています。これは勿論、甘いリリズムとは異なる次元のものです。それは強烈な生物学的要素を含んでいます。アナキズムが生物学をその側面においているように。

やがてブルトンがこの世のものとは思われない新しいモラルを「相互扶助」の中に求める時代がくることを吾々は予想しなくてもありません。

(一九五六)